

人間関係に困難を抱える幼児の異年齢保育 における支援(4)

山本理絵*1・藤井貴子*2・近藤みえ子*3

1. 研究目的

本研究では、人間関係に困難を抱える幼児に対する支援について、安心して自分が出せ、異質性や多様性を受け入れやすい特徴をもっている異年齢集団の保育を通してどのような関係性が発展し、どのような援助方法が有効か保育実践の継続的観察及び保育者等からの聞き取り調査の分析により明らかにする。その際、活動内容、参加の形態・方法、保育者の働きかけ等によって、おとなとの関係、子どもたち同士の関係や、子どもの安心感、受容・承認、援助・自己調整、自尊感情¹⁾がどのように変化するか検討する。

先に報告した論文(1)では、3歳から5歳の子どもの異年齢クラスにおいて、全般的に知的発達に多少の遅れがあり集団に入ることが難しかった子どもを中心にとりあげた²⁾。論文(2)(3)では、1歳児から5歳児の異年齢クラスにおいて、落ち着きがなく、相手の気持ちに気づくことや自分の要求を出すことが難しかった子ども、及び衝動的で暴力的な行動が多く、トラブルになることが多かった子どもを中心に、その変化を分析した³⁾。

このような子どもも異年齢のクラス集団では、甘え—甘えられる関係、憧れ—憧れられる関係、認め合う関係、教えてほしい—教えてあげる関係の中で、他者を受容・承認し、友達を援助しようとしたり、自己主張と周りの要求とを自己調整しようとしたりする姿がみられた。次第に年少の子をかわいがったり気かけたりするようになり、甘えられたり、憧れられ、慕われる側になっていき、指示を出したり、援助したりし、5歳児としての自覚や自己肯定感が育っていつている。

その事例を通して異年齢保育においては、年長児等のやっていることが見えやすく、わかりやすくし、見通しをもちやすく、模倣しやすくし、年長児に支えられて安心感をもって意欲的に活動に取り組めるように援助すること、興味をもて達成感もてる活動や玩具を用意すること、やりたいことを保育者が丁寧に聴き取り集団での活動に発展させていくこと、小グループで生活したりすること、その子が今やっている活動を肯定的に意味づけたり、できたことを実感できるようにほめたり、見て真似したり自分もやってみたいと思えるようになる環境を設定すること、活動内容や方法をわかりやすく伝え、保育者がやって見せたり一緒に行ったりすることが重要だということが示唆された。

今回の論文では、3歳から5歳までの子どもが同じ部屋で生活している保育園で、集団的活動へ参加しにくかった子どもの事例を取り上げて分析する。子どもたちどうしの関係については、前回の事例分析と同様、a.甘え—甘えられ・頼りにされる関係、b.憧れ—憧れられ、c.認めあう関係、d.教えてほしい—教えてあげる関係、e.要求しあい、鍛えあい、励ましあう関係などの視点から人間関係の発展をとらえたい⁴⁾。とくに、活動内容・設定のしかたの違いに着目して分析したい。

2. 研究方法

A 保育園の異年齢クラス(3～5歳児20名)において月1回程度の観察及び保育者とのカンファレンスを2年半以上継続的に行っており、その記録を分析する。観察は、午前9時すぎごろから11時半ごろまで、通常の保育の流れの中で参与観察を山本・藤井の2名

で行った。カンファレンスは観察の後1時間程度、クラス担任と一緒に、注目している子どもについての1か月間の状況・変化や気になっていること、観察でみられたことなどを報告し、その意味や今後の方針などについて話し合った。観察・カンファレンス終了後に筆者らで記録を作成し、内容を確認した。

3歳児の頃から集団的活動への積極的参加がみられなかったK(男児・9月生まれ)の記録を、活動意欲・目的意識、友達との関係を中心にその変化を分析した。5歳児の時期は、対象児が“病院ごっこ”に参加していく過程を中心に検討する。①活動意欲・目的意識(見通し、認識、期待など)、②友達との関係を中心にその変化を分析する。以下、対象児の記録に基づく行動を記述し、前述の観点からの子どもの変化には下線 を、保育者の働きかけには を記した。

本研究の実施・発表にあたっては、対象の保育園及び保護者には文書で説明し協力の承諾を得、愛知県立大学研究倫理審査委員会の許可を得ている。

3. 分析結果

(1) 3歳児(9月～3月)の時期のK児の姿

①目で見て興味が持てると活動意欲が高まる

K児は、朝の身支度の際や一斉の活動で自分の番を待っている間などに、目に入ったもので遊んでしまうことが多かった。また、手遊びなどは一緒に手を動かすことが難しく、わからないのでうろうろしていることが多い。しかし、友達が作っているものなど、目で見て興味が持てると自分も作りたがり、集中して取り組めるような場面がみられた。

- ・運動会に向けてリレーの練習をしていて待っている時、友達と2人で葉っぱを見ていて、みんなが移動したことに気がつかない。「□(3歳)さん、こっちだよ」と保育者に呼ばれると「ぼくもいくの?」と、自分のことだとわかっていない様子だった。保育者が「□さん」と呼んで目が合うと行けるが、やりたくないときは、名前を呼んでもやらないことが多い。しかし、保育者が手を差し伸べれば来ことも多い。運動会では、ケンパは丸にそってはできないが、参加できた(9、10月)。
- ・制作で、ダンボールにどんぐりを並べていくものは、「まだやりたい」と貼る場所がなくなるまで根気よく行った(10月)。
- ・お店やさんごっこで、おすしやデザートづくりをしたとき「Kくんもやりたーい」と言って、パフェや

プリン、お茶を作った。ふたのできるパフェのカップがお気に入り、1週間くらい握りしめて離さなかった(10月)。

- ・制作に興味を示すようになってきて、他児が何か作っているのをみつけると、同じことをしたがる。しかし、「待っててね」と声をかけると、じっと待っている(10月)。

このように個別の誘いかけがあつたりやることははっきりしていると、K児も集団の活動に参加してくる。K児がモノに興味をもてるのはよいが、ちょっとしたことで興味が別のものに移って集中できなかつたり、場所が狭いと落ち着いて遊べなかつたりした。

- ・絵本は集中して見ることができると、ホールで他児が座っているシートの線をなぞり始めたらそれが気になって後ろを向く。一回興味がそれるとなかなか戻れない。
- ・11月に園庭でスコップをもって「工事やっている」と観察者にイメージを伝える。しかし、ちょっとした大きい子が鉄棒をしているのをじっと見て、「それ難しい?」ときく。自分もタイヤを4段積んであった上に載って鉄棒におなかをのせようとする。体験に来ていた中学生に見せようとし、「どうだった?」と観察者にきく。
- ・好きなブロックで遊びたかったが、場所が狭くてうろうろし、友達の作ったカプラを壊したり、ブロックで作ったものを取り合いになったりした。場所があれば落ち着いて遊べる。カプラは友達が作ったのを触るとがたがたと壊れるのが快感で、通りがかりに触って壊してしまう(11月)。

11月に3歳児(26人)だけで劇の発表会に向けて練習をすることになった時のK児の姿は、以下のようだった。

- ・劇の練習に取り組むために部屋が遊戯室に変わって、空間が広がって落ち着かず、くるくる、ふらふらしている。劇のせりふにはあまり興味がないのかわかっていないようだった。絵本を読んだ後に「何役やりたい?」とK児に訊いても、すぐには応えられず、隣の子がサルをやると言ったので、「Kもサルやる」と言った。出番やせりふがわかっておらず、待ち時間にはぐるぐる部屋を回っている。声掛けだけでは来なくて、保育者が手をつないで座らせる。みんなが座っているときに後ろで騒いでい

る。

- ・何回もやっているわらべうたは、11月頃から以前に比べて参加するようになり、自分の順番がくるのを楽しみにしている。自分の順番が来ないと「Kくんもやりたい」と言い役交替できるようになった。
- ・1月には、だんだん劇のせりふを言うようになった。みんなで歌うときも興味がなく寄ってこなかったが、意外と覚えていて歌うようになった。

このように、何度も繰り返し経験することで、理解し、見通しをもって参加できるようになっていく。

②人とのかかわり方わからなかったが、少しずつ言葉で主張できるようになる

K児は、朝保護者と別れるときに一緒にいてくれた保育者にずっとひっついてることがあったが、10月頃からは、以前に比べてだいぶ保育者から離れて遊べるようになった。

- ・9月頃から、友達とのかかわりをより求めるようになってきたが、突然抱きついたり、しがみついて離さないようなことがある。友達に「やめて」と言われても離れることができず、保育者に言われて、ようやく手をゆるめる。「好き〜」「カワイイ」と言って、年下の子も含めて、気に入った子に抱きつく。嫌がられているのがわからず、離れない。突然抱きつくので、相手に怖がられないよう、保育者が傍に寄り「一緒にあそびたいねえ」などと声をかけたり、嫌がっている顔に気づかせたりする。好きな男児と一緒にケンケンスクーターで遊んでいるが「来ないで」と言われて悲しそうな顔をすることもあった(11月)。
- ・9月から、自分の思い通りにならなかったり、自分が否定されたり、気に入らないことがあったりすると、「もうみんなあっち行って」「みんな死んで」「バカ」「シネ」と言ったり、友達に手が出してしまったことが多く、周りが反応するとひどくなるので保育者は聞き流すようにしていた。また、「ほしかったんだね」と代弁して肯定的な声をかけるようにしてきたら、10月には暴力はだいぶ落ち着いた。クラスの子どもたちも、「シネ」「バカ」と言わないことを約束として話し合ったが、その言葉は減っていない。ただ、周りの子たちが言い返すことができるようになった(11月)。

- ・トイレに行くように同年齢に言われると怒るが、年上の子が呼んでいたら、怒らなかった。しかし、モノの取り合いでは2歳の子にも手が出る。保育者が「小さい子が使っているみたいだよ」と言うと、K児は「あの子が終わったらだね」と保育者に言うがまんする(10月)。

友達とのトラブルではとくに、気に入ったものを取り合う姿がよく見られた。

- ・10月に、お店屋さんごっこで友達とやりとりした。お気に入りのものを友達が触ろうとすると怒っていた。保育者の支えで、こうしたかったという主張が少し出るようになり、手が出ることは少なくなった。しかし、「ほしかった」で終わったり、「かして」と言いながら強引に使いたいものを奪うことがある。「あとでカシテて言う」と言うときと、「でも今使いたい」と譲れないときと、日によって違っている。ゾウのぬいぐるみが好きで、おんぶしようとしたらなかったときは、「ない」と言っていて、くまで折り合いをつけた。あとで友だちがゾウを見つけて持ってきてくれた(10月)。
- ・11月の朝、砂場に観察者をひっぱって行って、友達が遊んでいる砂場に「山作る」と言って参加する。トンネルを友達が作っているのを見て自分もやろうとして、スコップで砂が友だちにかかってしまったが、「かかった」と言われたら「ごめんなさい」と言う。タイミングよく言えるときもあるが、タイミングをのがすと頑なに言わない。

K児は、4歳を過ぎた11月頃から、「なんで?」と聞くことが多くなった。理由が納得できると行動に移せるようだった。

- ・つるつるした1つしかないブロックがほしくて、取り合いになって、K児は自分からは気持ちが伝えられなかったが、「かして」と言うように援助していたら、「いいよ」と言われる。「遊んだら返してね」と言われて「わかった」と言ったが、15分後くらいに「返して、返して」と言われて「だってこれで遊びたかったんだもん」と言って返さず、「ほら嘘ついてる」と言われる。「後で返すね、というのが今きたんだよ」と保育者が言うと返す(1月)。

とくに同年齢児同士ではトラブルになることが多かったが、3歳児の3人の女児はK児のことが好き

で、3歳児同士で一緒に遊べることもあった。

- ・1月には、3歳の友達と2人でトントンと紙ずもうをして、力士が台から落ちると喜んでいて。勝負に関係なく、落ちることをおもしろがる。

K児にとって、自分のことを好きで、一緒に遊んでくれる友達がいることは、受け入れられていると感じ、自己コントロールにつながっていると思われる。

(2) 4歳児前期(4~10月)のK児の姿

①新しい生活に慣れ自信をもつようになる

生活の部分では、K児は状況の変化に慣れるのに時間がかかるが、次第に慣れていっている。

- ・食事は4月からランチルームで行うようになった。初めはランチルームではみんながいるから嫌だと言っていたが、保育者が手をつないでドアのところまで行くと「じゃね、後でね、バイバイ」と言って気持ちの整理がついて入っていく。それを続けていくうちに部屋から自分で行くようになった。
- ・4月には朝の準備をせずに、自分のカバンを背負ったまま好きなところに行くことが多かったが、5月に入って少しずつ生活リズムができてきた。シール帳を出してシールを貼ったり、お手拭きタオルをかけたり、少し自分でできるようになった。まだ気分が乗り切れない時や、友達と喧嘩したりした時は自分ではできず、ポーっとしている時もあるが、声をかければ自分でやれるようになった(6月)。

K児は生活リズムに慣れてくると、できることが増えて自信をもつようになっていった。

- ・5月には、レゴを作るのが好きで、飛行機や車を作って集中して遊んで満足している。ブロックで上手に作って一生懸命見せていて「ひとりで作ったの」「頑張って作ったの」「一気に作った」と一生懸命、来る人来る人に言っていた。その作品ができたとき保育者が大いにK児を褒めて「すごいK君」と言ったのが嬉しくて、できると見せに来るようになった。絶対に作品は棚に飾りたいようで「飾ってもいい？」と言うので「いいよ」と言って飾っている。しかし、次になると忘れていたようで「これ誰が作ったの？」と言っている。「これはKくんが作ったじゃないの？」という、それで遊ぶ時もあるし、どうでもいい時もある。作った日は「Kくんが作ったのだから触らないで」と言うが、次の日になると忘れてしまう。後で担任が片付けてしまっ

も、何も言わず次の日は最初から作っている(5月)。9月にも、自分で作ったものを満足して眺めていた。

- ・7月には、夏の生活に入ってプールを楽しんでいた。着替えや朝の支度などもマイペースではあるが、他児と同じように自分でやっている。わからなくなると保育者に寄ってきて聞いて教えてもらって自分でやったりしている。
- ・プールの中で「見て見て」と観察者にも盛んに言う。保育者のまたをくぐっていたら潜ることができる様になった。少しずつ、できることが増えてきて本人も満足している(7月)。

一方、予告しないで突然行くと、パニックになったり恥ずかしくてできなくなったりわざとふざけてしまう姿もあった。

- ・行事で、すいか割りや相撲大会など、一人ずつ出ていくことが突然始まってしまうと、事前に言わないと恥ずかしいのと、聞いてなかったのとで「いやだー」とすぐ拒否されたことが以前あった。事前にわかっていると「明日は〇〇やるんだよね」とすぐ確認してくる。K児が楽しくできるように「明日は〇〇だよ」とか散歩の前は「散歩だよ」とか、事前に予告しながら納得させていくとスムーズに入って行ける(9月)。
- ・運動会に向けて散歩先でかけっこなどをやってみるが、初めのうちはK児の表情が少し暗く、不安そうなどころがあった。あちこちに移動することが運動会が多いので、自分はどう動けばよいのか不安で、みんなが行く方について行くという感じだった(9月)。

保育者はK児に個別に予告をすることの他に、ペースが極端に遅れたり、できなさを感じたりすることがないように、配慮していた。

K児は失敗や極度の緊張は嫌なので、自分でも失敗しないように、みんなに注目が集まらないように考えてやっていた。部屋でもK児がつまずきそうなことについては、保育者が声をかけるようにしていた。

- ・朝の準備では、K児は遅くなって最後まで残ってみんなから注目を浴びると「恥ずかし、嫌だから」と不機嫌になってしまうので、そういうことをなるべく避けるように、「Kくんシール貼ったかな」などと声をかけてみんなと同じペースで終わるようにし

ていた(9~11月)。

このように、保育者が、K児ができたことをほめたり、緊張したり不安にならないように個別に声をかけて配慮することで、集団の活動に参加できるようになっている。

②攻撃的な言動が減り、自分の思いを少しずつ言葉で伝えるようになる

K児は、保育者に甘え、スキンシップを取ることで、より、安定して友だちとも関われるようになっていった。

- ・ K児は、保育者にも自分から「おはよう」とはなかなか言えないが、「○○ちゃん可愛い」「スキスキ」と言ってキスをするようにスキンシップを取ることを朝の挨拶のように行っている。お母さんとすぐに別れられ、すぐに保育者に目が行くようになってきている。保育園から帰るときも必ず、近くにいる大人に対して服にチューとして帰る。友達にはやらないように、担任が「わたしのお腹はオッケーだよ」と言っている(5月)。
- ・ 7月も毎日、担任とこのようなスキンシップが続いていた。「おはよう」と言ってお腹にいつものように「チュ」とすると、朝は機嫌が良く準備ができる。帰りも同じようにして帰るが、それで安定して過ごせている。

このように保育者との関係をつくりながら、比較的生活が落ち着いてきて、些細な喧嘩はあるが暴言を吐いたりするような目立つ行動はなくなってきた。友達とトラブルがあったときも、保育者の話を聞いて言葉で主張することが少しずつできるようになっていった。

- ・ 4月当初はカメの玩具をすごく気に入って、他の子が使おうと「Kくんだよ」と言って友達を叩きに行こうとしていた。保育者がその都度「止めてね」「だめだよー」と優しく声をかけていたら、ダメだよと言われるのが嫌で怒るようになった。そして、保育者の表情を見て目が合うと「ダメだって言うよね」と言われる事を予想して聞いてくるようになった。根気よく少しずつ伝えていけば理解することができ、暴言や暴力は、その都度話をできて減ってきている(4月)。
- ・ 友達関係も4月の時に比べると6月には少しずつ友

達と遊びたいという気持ちが出てきて、「貸して」などと言えるようになってきた。「嫌だよ」と言われると前は力づくでも引っ張って「Kくんの」といって取っていたが「○○ちゃん(担任)に言っちゃうからね」と攻撃的ではあるが、手が出るようなことなく口で言えるようになった(6月)。

- ・ 喧嘩の時自分が悪くなくて相手が嫌なことをしていたときは本当に嫌だと全身で表現して、声をかけてもその時は聞く耳を持たず、外でも部屋でも倒れていやだと全身で表現して泣く。そういう時、K児の気持ちを受け止めて「どうしたの、何が嫌だったの」と言うときと少しずつ落ち着いてきて、言葉で説明してくれるので、担任も対応していくと納得してくれる(6月)。

とくに4歳児だけで集まるときは同年齢だから譲り合えないことがあった。異年齢のクラスだと上の学年や下の子がいるので、K児は譲り合うこともある。自由遊びでは、3歳児とブロック遊びを楽しめる姿も見られるようになった。

- ・ 同学年の子は気が強い女児が多く、何か言うと倍になって返ってくるということがあったが、3歳のおとなしい男児達を自分から誘って、一緒にカプラやレゴをやっている。5歳児が「Kくんのブロックすごいじゃん」とほめてくれる時があるので一緒にレゴをしている(7月)。

このような積み重ねのなかで、K児は、喧嘩など困ったことがあると、保育者に自分で伝えに来るようになった。そこでは、友達とトラブルが起きても、自分では何と言って解決したらよいかわからない姿がみられた。

- ・ 友達とトラブルがおきて、「△くんが」と保育者に言いに来たので「きちんとお話しておいで」というと「言えないもん」と諦めようとする。「一緒に行ってあげるから、お話してきて」「Kくん、お話して?」というときK児は「なんていうの?」と、自分で考えて言うのは難しいようだった。抽象的なことを言葉にしたりはするのは苦手で、「何が嫌だったの?」と問えば「おもちゃをとられて嫌だった」と言えるが、自分で嫌だったことを話してごらんというとうわからなくて「嫌だったの、嫌だったの」と言っている。限定して質問するといいが、広い質問をするとわからなくなってしまう(9月)。

- ・食事の際の友達との会話は、自分から話題を出すのではなく、誰かが好きな食べ物を言っていると自分も好きなものを言うという感じで話している（7月）。
- ・散歩に行き帰る時、K児と手をつないでいた3歳児は手を引っ張られたことを契機にずっと泣いていた。K児はその子が好きなのだが、K児が自分の気持ちを素直に言って相手が受け入れてくれるまでにはまだなっていない（9月）。

(3) 4歳児後期（11～3月）のK児の姿

①周りを気にして、自信がないと照れ隠しする

11月頃から、K児はできない、わからないと思うと照れ隠しをしてしまう姿が見られるようになった。劇の練習が11月にあった時の様子は、以下のようであった。

- ・K児は一番最後に出てくる役だったので、それまでに集中力が切れてしまって、最後に出てくる時にはフラフラして照れてふざけてしまった。最初は劇あそびに入れなかったが、劇の内容は気に入っていて家でお母さんに本を読んでもらったりDVDを見たりしていた。「こんなセリフがあったよ、書き足してよ」と保育者に言うくらい見えていて、自分ではすごく楽しそうに話をする姿もあった。
- ・12月に入って練習が進んでいったが、やはり照れが出てしまうので最後の最後まで同年齢の男児の陰に隠れていた。一言せりふを言うのも一生懸命で、K児なりにはすごく緊張した顔で言っていた。リハーサルなど、いろいろな保育者に見てもらう時にすごく緊張してソワソワしていたが、ほめるとすごく喜んで、終わると緊張がはじけるようで、騒いだりうろろしたりする。本番では自分の劇が終わると緊張の糸が切れて動き回ったり、おしゃべりしたりしたが、4歳児だけで最後に歌を歌った時も前に出てきちんとやっていた。
- ・クラスでわらべ歌で遊んだ時は、3歳児も5歳児もいるのでうまくできていたが、4歳児だけでわらべ歌をやった時は、ついていけなかった。円になって、鬼が「おしりたたいてかっぱのこ」と叩いたら、その叩かれてお尻を触られた子は一番前に行って、歌に合わせてかっぱの子をやるが、そのルールが理解できなくてみんなを乱していた。やる前から、不安があるのか、テンションが高くなってわざとふざけて騒ぐ（12月）。

このように、自分がうまくできそうにないことが予測でき、「恥ずかしい」と思うということは周りが見えてきたということであり、その意味では成長が見られる。

12月頃、ブロックでは自信がついてきたようだが、制作など他のことではまだ自信がない様子が見られた。

- ・わからないというのも悟られたくないようで、保育者が「失敗してもいいんだよ」「わからない時は聞いてくれればいいよ、わからなかったら手伝うよ」と言っても、ふざけて、できないことを隠そうとする。制作で何かを作るときも、2人ずつ呼んでいたが、K児は一人で陰に行き、保育者と1対1でハサミを使ったりしていた。切れないわけではないが、見られていると「線ちがうよ」言われるのが嫌なのか、みんなの前ではなかなかできない。やったらできるのだが、自分からはやりたがらない。特に女兒が教えてくれようとして違っているところを言うので、K児はそれを気にしているところがある。しかし、制作は、異年齢クラスでやると3歳児はK児よりもっと遅い子がいっぱいいるので、K児のほうが3歳児を見守っている（12月）。
- ・朝の身支度では、12月頃には、ゆっくりではあるが、少しずつみんなと一緒に、個別に「やったの?」と聞かなくてもできることが増えてきた。気分によってやってなくて遊んでしまうときもあるが、できている日が増えてきている（12月）。

しかし、2月には、K児は迷路を見たり描いたりするのが好きになったり、大縄跳びなどにも挑戦して跳べるようになった。

- ・迷路が好きで、迷路の絵本やマップの中から何かを探し絵本をよく見ている。家にもその絵本があって見ている。迷路を自分で描くときには、他の子は二重線で幅のある道路を描くが、K児は1本線で後から二重線を付け足す（2月）。
- ・カルタは、他の子がほとんど大人顔負けぐらいに取っていくので遅れていたが、わかっている札は自信をもって取っていた（2月）。
- ・以前はK児は、できないことは嫌でやらないこともあったが、2月には大縄跳びもできるようになった。1回やったらできて、そこで最初に自信を持ったようで、20回ぐらい跳べるようになって、好きになっ

てよくやっていた。他の4, 5歳児も自分の縄でやっていてK児も持ってくるが、まだ自分で回して跳ぶのは難しくて、魚釣りと言って遊んでいる。

同じ縄跳びでも、年齢に関係なく、自分のやりたい方法で選んでやれるように、多様なやり方を保障しておくことが大事だといえる。

②同年齢の友達と少しずつ一緒に遊べるようになるがトラブルも増える

12月、K児は、担任保育者に対して朝は「〇ちゃん可愛いね」とは毎日言っているが「チュチュ」はなくなった。大好きな友達を見つけてそっちのほうへ行っ行って遊んで楽しむようになった。

- ・これまでは、一人遊びが多かったが、レゴなどで遊んでいる時は「これできたよ」とか「これ～～なんだよね」と同年齢の友達とも何かにみたてて遊んでいる姿も出てきた(12月)。
- ・喧嘩や言い合いをしたときに、以前は悪いことをしてしまったという意識は本人にあっても、「ごめんね」がなかなか言えなくて、わざと保育者の言うことを真似したり、おうむ返しして茶化したりふざけることがあった。しかし、少しずつ自分が悪いなと思った時は、保育者が何にも言わなくても大人の顔色を見ながら「ごめんね」と言いに行く姿が出てきた(12月)。

このように、異年齢クラスでK児も安心して過ごせるようになっていたが、2月から異年齢のクラスから変わって同年齢の子どもだけの部屋になった。生活の流れは変わらないので、朝の流れや身の周りの事はマイペースでやっているが、トラブルが増えて手が出たりするようになった。

- ・それまでは、K児の使いたい玩具が他児と重ならずに使えていたが、同年齢の生活になってきて、使いたいものが重なって使えなくてトラブルが増えて、友達を引っ掻いたりする。その都度保育者が仲裁して声をかけているが、本人も自分の思いがあって、その後反省するがまた同じことをやったりする。
- ・みんなで粘土などをやっている時はそれほどないが、ブロックで遊ぶときは最初の15分ぐらいはよいが、ブロックが少なくなってくるとたえまなく喧嘩している。ブロックが好きでブロックを出すと絶対喧嘩になってトラブルになる。友達の首を絞めた

り引っ掻いたり、すごい喧嘩をする(2月)。

- ・2月にブロックを出すのをやめ、カプラを出したら、K児は、カプラで迷路を作っていて壊されたと言って、周りの子とトラブルになっていた。
- ・K児が迷路を描いていて紙を1枚取りに行こうと思ったら他児が持ってきたので、それを一寸取ろうとしたのでトラブルが起き、それを見ていた子が保育者に言いに行った。するとK児は保育者の所へ行行って「ごめんね、ごめんね」と言う。戻って来ると、自分の座っていた椅子に他児が座っていて、困っていたので観察者が「Kくんが座っていた椅子だよ」と言ったのでどいてくれて座れた。まだ自分で言うのは難しくて、毎日そういうこと繰り返している(2月)。

(4) 5歳児の時期のK児の姿

①4～5月のK児の様子

新しいクラス編成になり、K児は不安な様子だったので、朝は担任が抱きしめるようにしていた。朝の身支度は、以下のような様子であった。

- ・身支度は本来は自分でできるが、キーホルダーやシール帳など、目に入ったものに興味や気持ちが向くと、そのことが満足するまで、保育者が呼びかけても「わかっている」「うるさい」と言うことが多く、身支度にもどってくるまでに時間がかかる。
- ・朝の支度で、1つコップ袋を出したら気になりずっとコップを出したりしまったりして、声を掛けると「わかってるー」と言いながら、次はシール帳のページをめくってはずっと遊んでいる。朝の集まりが始まっても急ぐことなく、マイペースで準備が進まないため、担任は「できたらおいでね」と声をかけ、無理に急がせないように見守っていくようにする。できたことを認めていくことを積み重ねていく(5月)。

クラスのメンバーが替わり落ち着かないこととともに、K児は年長児で5歳半となり、他者に言われずに自分で自分を律していきたい時期⁵⁾になっているので、保育者はその思いを尊重して関わっている。K児は自由遊びでは、ブロック(レゴ、LaQ)、粘土、描画と、その日の気分で自分から遊びを見つけて楽しんでいた。しかし、友達とのトラブルも多かった。

- ・レゴブロックの大きな基礎板を5, 6枚自分のものにして、他の子が1枚持っていくと、「全部自分の

もの”と怒って取り合いになることが多い。同年齢の友達とのトラブルが増えた。担任がK児と話をするが、“すべてほしい”“譲れない”という思いが強く、なかなか納得ができなかったり、謝ってもなげやりな「ごめんね」になり、その後の立ち直りにも時間がかかる(5月)。

K児なりに作りたいもののイメージをもって、それを作るためには、基礎盤とたくさんのブロックが必要だという思いが強かったのではないだろうか。友達と遊びたくないわけではないが、まだ一緒にひとつのものを作るということは難しい段階だったと思われる。しかし、保育者が設定した個別の活動には積極的に参加する姿が見られた。

- ・K児は好きな男児にくっついて行って、追い掛け回す。くっつくことでアピールし、言葉や遊びの中で上手に関係をつくるのが難しい様子が見られた。
- ・麦わら帽子に描く絵の下書きでは、好きな電車や新幹線を自分のイメージに基づいて描くことも楽しんできた。
- ・壁面の制作を「Kくん上手でしょう?」と訊く。好きなことをほめていくことで、より張り切って他のこともやっていく姿がみられる。

②K児の迷路遊びの広がり(6~8月)

5月からK児を含む5歳の男児3人が、各自迷路の絵を描いて楽しんでいた。6月にかけて、積み木(カプラ)でも、迷路を作って遊ぶようになり、保育室の半分ほどの大きさになる。

- ・カプラで大きな迷路や街を作ることは、K児がリードして楽しむ。各自担当している箇所が離れており、喧嘩せずに作り、つなげることができた。「もっとでっかい迷路にしたいね」と言う友達に、K児は「こっちに船できたよ」と応えていた。

たくさんあるカプラで、しかも一緒に作っている友達と場所が離れていたことが、トラブルにならずにうまくいった要因であろう。

次第に迷路が道路に変化し、参加者も増え、坂道や駐車場を作るようになっていった。部屋いっぱい広がるカプラを見て、面白そうと思った3歳児たちは、「自分たちも作る!」と真似していくようになる。5歳児たちが新しい部分を真剣に作っていて気づいていない間に、3歳児のみならず、5歳児たちが前から作っていた道路につなげて、「大きいのできたねー」

「上手にできた〜」と自分たちの力でかっこいい物ができたと大満足して拍手していた。

7月には、カプラで道路や船など大きなものをクラスみんなで作ることが好きになった。

K児も午前中ずっと集中して遊んでいる事も多かった。片づけの時間になると5歳児が「ねえ〜壊したくない〜」と言い、K児も「このまま置いときたい!」と言う。クラスで話し合い、壊れない道路、色々なお店や遊園地、動物園も作りたいという意見が出て、クラスみんなで街を作ることに決定した。

模造紙を貼り合わせた上に5歳児が道路の線を描き、4、5歳児で道路、芝生、池などを絵の具で色を塗る。他児が「ここは池にしよう」「じゃあ水色塗るね」と言うと、K児は「じゃあKくん、船作ったるわ」と、イメージを膨らませていった。年中の男児たちは「ぼくたちも船作りたい」と参加していった。

友達につられてであるが、K児が自分の要求を言葉で表現でき、それを認めてもらって実現することができたことは、自信や自己肯定感につながったと考えられる。

8月からは、大きな街の土台ができたので、「この上にお店やさんや遊園地、家、車など、街の一つ一つを作りたい」ということになった。この街作りに使う空き箱も集まり、みんなでどんな箱があるか広げていくと、4歳児は、箱を積み上げて家を作ったりして遊んでいた。「お城も作りたい」などの意見が出ていた。しかし、その後プールを中心とした夏の生活になり、街づくりは休止となる。

③クラスでの病院ごっこへのK児の参加(9~2月)

9月から新しく病院ごっこがクラスでブームになる。この遊びの発展の経緯とK児の参加の様子を述べる。最初は3歳児の6人で、部屋のままとのコーナーで、布を布団にしたり、ままとの野菜やアイス菓子を薬にみたてて毎日楽しんでいた。次第に5歳児の女児3人が参加し、さらに4歳児2人が薬づくりを楽しんでいき、病院もだんだんと大きくなる。

3歳児同士で包帯を巻いたり、4歳児が看護師さんの帽子を作ろうとしたり、5歳児が待合室の3歳児に寒いからとひざ掛けと温かいお茶のサービスをしたりしていた。また、3、4、5歳児数人で薬を作る真似をしたりして遊んでいたが、このころ、K児は、あまり病院ごっこには参加してこなかった。

遊んでいくうちに「病院の部屋が欲しい」「ベッド

があったらいいな」と欲しいものができて、9月末からクラスみんなで話し合って、少しずつ病院を作ることになった。

10月 壁づくりで、子どもたちで決めて、ダンボールを白・薄ピンク、黄、黄緑に分けて絵の具で塗っていく。病院の壁に花や動物、魚など自分たちの好きな絵を描き、それを壁に貼ることになる。「かわいい絵をいっぱい貼ってあげる」「こっだけあったら、小さい子も泣かないね～」「かわいいのいっぱいだもんね」と言いあいながら作っている中に、K児も楽しんで参加する。外壁が完成すると、中に入りみんな大喜びだった。

K児も興味をもって参加し、「机と椅子は、ここにする？」と、率先して友だちと関わりながら置いたり移動させたりと配置を決めながら楽しんでいた。

11月 葉づくりにもK児は参加している。ペットボトルに自分の作りたい味の絵の具を入れ、思いっきり振っていく。K児が「オレンジ味きれいじゃん」と言うと、3、4歳児が「Rのはいちご味」、「いちご～」、「Iちゃん、れもん。きれいだね」、「きれい～」と、色が変わったり、ほのかにする洗剤のいい香りにうれしそうにしていた。

また、5歳児が「風邪ひいた時に粉のお薬飲むよね」と言うので、保育者がどうやって作ろうかと相談すると、3歳～5歳児の発言で、粉薬も作ることになり、さら砂を集めに行ったり折り紙を細かく切って透明な袋に入れたりして、K児も楽しんで参加した。

12月 看護師さんから借りた本物の聴診器を交替で全員で体験する。K児は、一番に聴診器を聴きたがり、「聞こえた……ドンドンって」と、とても驚く。みんなが医者役も患者役のどちらも楽しみ、その後、廃材で作った聴診器で診察を開始した。「痛いところありますか?」「ここが痛いよ～」「ここですね」「うふふ……はい」などとやりとりしていた。

1月 医者の机づくりでは、5歳児が「星がいっぱいのがいいな」「色んな色の星にしようよ～」と言っていると、K児も「青い星にしよう」とたくさんの星を描く。

2月 枕作りでは、「ふわふわにしたい」と、プチプチシートを丸めてビニールテープで飾っていく。

K児は3歳児を寝かせて、「どう? いい感じ?」と枕の感触を聞く。「うん。ふわふわ～」とうれしそうに言われて満足していた。

他クラスの“プラネタリウム”の看板を見て、自分

たちも病院の名前をつけたいと、子どもたちは考え始める。「宇宙クリニック」「ニコニコクリニック」など色々なアイデアがでてきた中、「お医者さんの机、星だったから、お星さまにしようよ～」という意見から、「おほしさまこどもクリニック」に決定する。

他の5歳児が「看板に字書いたら、色塗りたい」というのを聞いて、K児は「K君、白にしよう」とクレヨンで書いた上から絵の具ではじき絵にしていく。

さらに、5歳児だけで、待合室の遊びのコーナーに、以前から楽しみにしていた街作りを行う。「名古屋城作る!」と、みんなで張り切ってスタートし、いろいろな箱を積み上げていくうちに、K児は「橋つけようよ～」とお城のイメージで言っていた。しかし、「なんか家みたいになってきたんじゃない?」「お家にぬいぐるみのつけたいねー」「めっちゃいいアイデア!」と家作りになってしまった。K児はお城にこだわらず、一緒に作る。「家けっこうすごくなってきた!」「滑り台もここにつけようよ」とみんなで協力して大きな家が完成すると、K児は「ポンドが乾くまでそうーっとしとかなきゃね」と壊されないように大事に隅っこへ持っていった。

これまでK児は、友達が提案したことに「自分も」と考えて活動することが多かったが、このコーナー作りでは、春から「お城を作りたい」という要求があり実物を見てイメージをもっていたこともあってか、お城に入る入り口の橋を作ろうと自分から提案している。しかし、お城が家が変わってしまっても怒ることなく、自分のイメージを変更している。楽しく作りながら考えることで柔軟に対応できたと考えられる。

その後、部屋で作ったものをホールに持って行って作品展用にセットすると自然に病院ごっこが始まった。作品展で他のクラスを招いて遊んだ後、またクラスの子どもたちでお医者さんごっこを楽しんだ。

④K児の他の場面での変化

K児は、朝の身支度については、4、5月は先述したように、朝の集まりが始まってマイペースで準備が進まなかった。しかし、カプラでの道路作りに熱中するようになった6月には、集まりが終わる頃には合流できることが増えた。

10月以降は、「今日は○○やる?」(病院作り)と目的ができて、朝の集まりにも遅れずに参加できるようになった。この頃、一人でもLaQでじっくり集中

して作ったりして落ち着いて遊ぶようになる。

1月以降は、K児は3歳児が遊んでいる所へ行きブロックの取り合いの喧嘩になることがよくあり、5歳児にたしなめられていた。5歳児が遊ぶような小さなブロックを楽しむことができず、3歳児が使っているブロックを好んで使っていたからである。担任が仲介していくと、「だっしてほしいもん」とふてくされることが多いが、保育者と話し合っただけでは渡すことはできなかった。3月には、そのようなときに、時間を決めて貸し借りするように保育者が提案すると納得したようで、それからは友達と話し合っただけで決まっていた。

4. 総合考察

初めての活動や場所に慣れるのに時間がかかり、一人遊びやトラブルが多く、集団の活動に積極的に参加することが難しかったK児だが、保育者との関係を支えにしながら、何度も繰り返して同じような遊びをする中で見通しができ、安心して過ごせるようになっていった。また、年上の子どもがやっているのを見て、憧れて同じようにやろうとしたり、作ったブロックをほめてもらい認められ自信をもったり、年下の子にも好かれ受け入れられて一緒に遊ぶ姿が見られた。物の取り合いなどの喧嘩が多かったが、保育者に仲介され我慢したり「ごめんね」が言えるようになるなど、自己コントロールできるようになっていった。できそうにないことに取り組もうとしなかったり、友達から教えてもらうことに抵抗がある時期もあったが、5歳後半には縄跳びにも挑戦するなど、自己肯定感が育っていったと思われる。とくに、3、4歳児の時期には同年齢同士だと喧嘩になるのに、異年齢では一緒に遊べたり、ルールがわからなくてもわらべうた活動に参加できたりして、異年齢集団の良さが効果的に作用していた。

積極的に友達に教えてもらったり教えたりする姿はあまりみられなかったが、異年齢集団の中で、自然に年上の子が教えたりサポートしてくれていたりと、年下の子が頼りにして真似していたりした。このような変化には、異年齢保育において以下のような援助が有効であったと考えられる。

①A保育園では、日常的に設定保育の時間が少なく、自由遊びの時間が十分取られている。身支度をせかさず、できたことを認めていき、好きな遊びを少数で楽しめる時間と空間があったことから、5歳児の時期の異年齢クラス全体の活動につながって

たとえられる。

②保育者がK児のスキンシップを受け入れながら安心感をもたせていった。K児は次第に友達とのかかわりを求めるようになり、トラブルが生じてても、保育者が代弁したり言い方を伝えていった。

③目に入ったものに興味をもちやすいK児にとっては、ブロックや制作、迷路づくり、街づくり、病院づくりなど、物を使う活動は、興味をひかれる活動となった。病院の壁を作る時には、率先して友達と関わりながら机と椅子の配置を決めていた。また、保育者は、病院に関連した物の写真や本物の聴診器を目に見える形で提示し、情動的な体験を通して、興味や意欲を高めた。

とくに、数がたくさんあり喧嘩にならないカプラを出したことが、5歳児の時期の活動の発展につながった。

④保育者たちは、K児が5歳児の年度には園で子どもたちの様子を写真に取り、つぶやきや会話をメモし、ドキュメンテーション⁶⁾を作成していた。ドキュメンテーションを見て保育者が保育を振り返り、子どもたちの興味の方向性を確認していた。そして、子どもたちのやりたい思いをよく聴いて、その願いを実現できるように、みんなで相談したり材料を用意したりして援助することによって、活動がプロジェクト的に発展していった。プロジェクト活動は、子どもの興味・関心や生活体験に即したテーマに沿って展開される活動である⁷⁾。病院づくりの活動は最初のうち、一斉に行うものは少なく、自由参加であり、K児は興味・関心のある活動に参加している。子どもたちには、多様な参加のしかたが保障されていた。

⑤保育者は個々の興味・アイデアを活かした参加に配慮し、遊びながら必要なものを作り、イメージを膨らませながらまた遊ぶという繰り返しによって、活動が継続していった。このような夢中になれるプロジェクト的活動の中で、お互いのアイデアを認め合い、K児の自己コントロールや自尊感情も高まっていったと考えられる。

K児の興味のある活動が展開されるようになると、朝の集まりも「今日は何をしよう」と目的を持って集まってくるようになった。どうやって朝の集まりに呼ぶかや、保育者が用意した集団の活動にいかに参加させるかを考えるのではなく、子どもたちのアイデアを取り入れながらやりたい活動を発展させることが、人

間関係に困難をもつ子どもにとっても重要であることが確認できた。

付記

本研究は科学研究費(2012～2016年度 基盤研究(c) 課題番号2453104 山本理絵研究代表)の助成による。日本保育学会第70回大会(2017年5月21日)で口頭発表(愛知淑徳大学福祉貢献学部 白石淑江氏も共同)した内容をもとに論文にした。観察・聞き取り調査を山本・藤井で担当し、記録の分析に近藤が加わった。

研究に協力していただいた皆様に感謝します。

注

*1 愛知県立大学教育福祉学部教授

*2 元日本福祉大学非常勤講師

*3 愛知県立大学非常勤講師

1) 山本理絵「異年齢保育で大切にしたいこと」『ちいさいなかま』No. 564 2011年9月号 pp. 32-37

2) 山本理絵・藤井貴子「人間関係に困難を抱える幼児の異年齢保育における支援(1)」『愛知県立大学教育福祉学部論集』第63号 2015年 pp. 99-110

3) 山本理絵・松川礼子「人間関係に困難を抱える幼児の異年齢保育における支援(2)」『愛知県立大学教育福祉学部論集』第64号 2016年 pp. 111-120

山本理絵・松川礼子・近藤みえ子「人間関係に困難を抱える幼児の異年齢保育における支援(3)」『愛知県立大学教育福祉学部論集』第65号 2017年 pp. 63-78

4) 山本理絵「異年齢保育の魅力」林若子・山本理絵編著『異年齢保育の実践と計画』ひとなる書房 2011年 pp. 36-40

5) 白石正久『発達の扉 上』かもがわ出版 1994年 pp. 216-219 参照。

6) 山本理絵編著『子どもとつくる5歳児の保育』ひとなる書房 2016年 p. 63 参照。

7) 同上書 pp. 59-62 参照。